

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例
-------	--

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

群馬県

○学校名

渋川市立赤城北中学校

○学校のURL

<http://www5.kannet.ne.jp/~akakita/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】5学級、【特別支援学級】1学級、【合計】6学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】124人（平成27年4月1日現在）

（内訳：第1学年31人、第2学年46人、第3学年45人、特別支援学級2人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成25、26年度 文部科学省人権教育研究指定校事業

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

「素直で思いやりがあり、自ら考えて実践できる、健康でたくましい生徒」

【研究主題】

自他を尊重し、望ましい人間関係を築く生徒の育成
～一人一人の居場所をつくる満点運動を通して～

○人権教育に係る取組ー口メモ

既存の学校行事や学習活動を入権教育の視点から見直し、「満点運動」（人権教育の視点を取り入れた教育活動）として位置付けた

○人権教育にかかる取組の全体概要

- ・ 一人一人の居場所づくりとして、生徒が主体となり「満点運動」に取り組む。
- ・ 「心の満点運動」や学校行事等と関連させた道徳や学級活動を実践し、「協力的」「体験的」「参加的」な学習指導を工夫する。
- ・ SST（ソーシャルスキルトレーニング）や5分間教育相談など、教育相談の技法を生かした活動を実施する。

学校教育目標

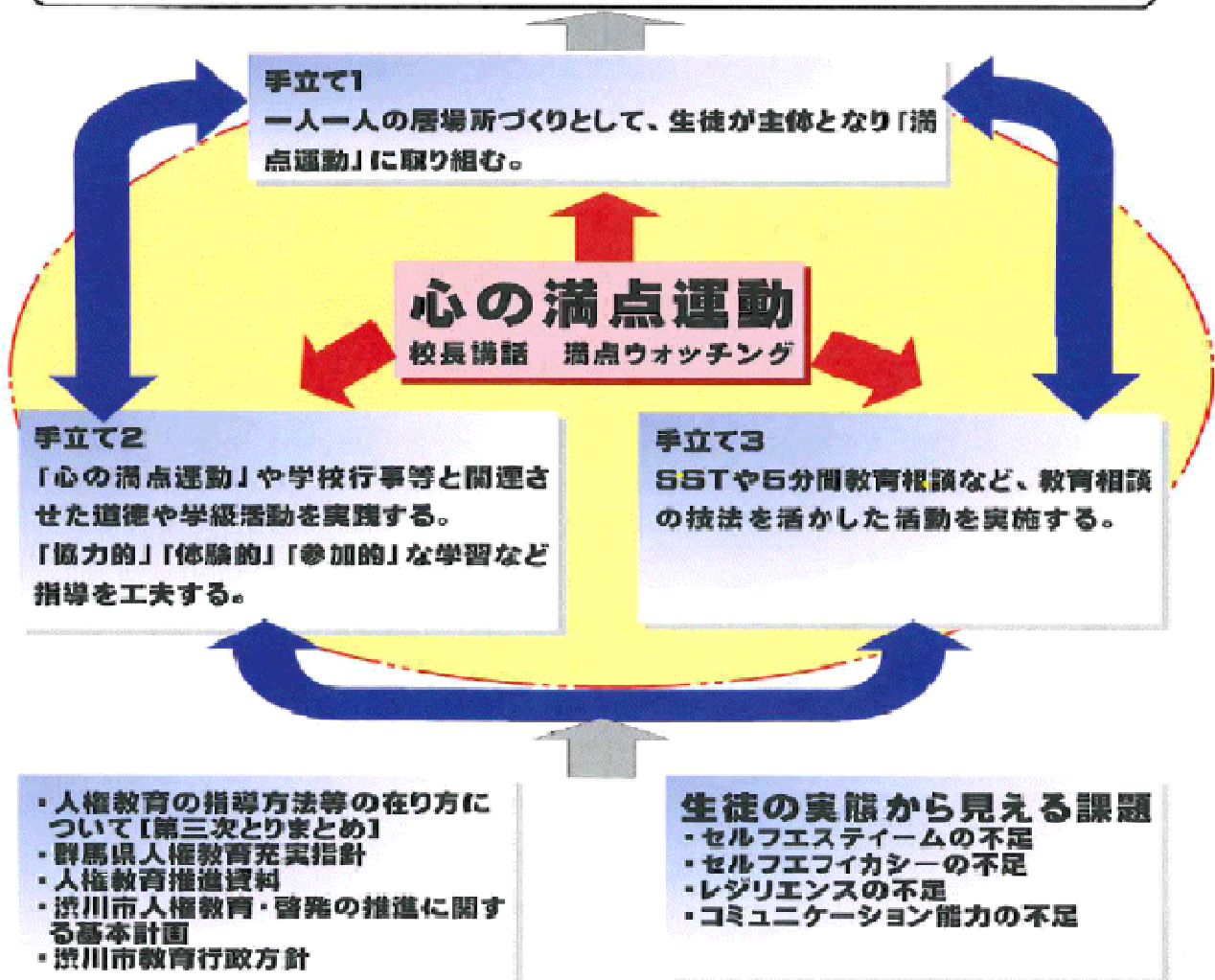
**素直で思いやりがあり、自ら考えて実践できる、
健康でたくましい生徒**

本校の人権教育目標

人権尊重の理念について理解を促し、生命を大切にし自他の人格を尊重し、お互いの個性を認め合う心、正義感や公正さを重んじる心等の豊かな人間性を育成する

研究主題

**自他を尊重し、望ましい人間関係を築く生徒の育成
～一人一人の居場所をつくる満点運動を通して～**



3. 特色ある実践事例の内容

(1) 研究のねらい

一人一人の居場所をつくる「満点運動」を実践することによって、自他を尊重し、望ましい人間関係を築く生徒の育成が図れることを研究と実践を通して明らかにする。

(2) 研究を始めたきっかけ

中学校での人間関係は円満で、落ち着いた学校生活を過ごしている。温和で素直な者が多く、挨拶や返事もよくできる。気の合った仲間同士では協力し合って活動でき、自分の役割にまじめに取り組むことができる。その反面、気の合わない者に対し心ない発言をする者や心ない発言に傷つくなど、いじめの問題や生徒の人権意識の欠如等からくる様々なトラブルや問題行動が見られた。授業においては、自分に自信がもてず、自分の考えや思いを積極的に伝えることが苦手な生徒もいる。

これらの背景には、自分本位の言動が相手にもたらす痛みを想像できないことや、セルフエスティーム（自尊感情）やセルフエフィカシー（自己効力感）の不足からくる裏返しの行動、コミュニケーション能力やそのための技能とレジリエンス（自己回復力）の不足などが考えられる。

そこで、人権教育の推進を通して、学校の中に生徒一人一人が安心して過ごせる居場所をつくり、自他を尊重し互いの違いを理解し認め合える生徒、望ましい人間関係を築く生徒を育てることが必要と考え、前項の図にある研究主題を設定した。

(3) 研究の見通し

前項の中央に示したとおり、「心の満点運動」を中核に以下の3つの手立てを講じれば、相乗効果により研究主題に設定した生徒の育成が図られると考えた。

- ① 一人一人の居場所づくりとして、生徒が主体となり「満点運動」に取り組むことで、常時指導が充実し、生徒のセルフエスティームとセルフエフィカシーが高まり、自他を尊重する生徒を育成することができるだろう。

（「満点運動」とは、一人一人の居場所づくりを視点に、既存の学校行事や学習活動を整理・見直した生徒主体の活動のこと）【手立て1】

- ② 「心の満点運動」（人権教育の視点を取り入れた校長講話）や学校行事等と関連させた道徳や学級活動を実践したり、「協力的」「体験的」「参加的」な学習指導を工夫したりすることで、一人一人の生徒が自分の意思や考えを表現し、異なる意見を受容し高め合っていけるようになり、望ましい人間関係を築くことができるようになるだろう。【手立て2】

- ③ SSTや5分間教育相談など、教育相談の考え方や技法を生かした活動を実施することで、友達とのコミュニケーションスキルが向上し、レジリエンスが高まり、自他を尊重し望ましい人間関係を築くことができるだろう。

【手立て3】

(4) 研究の内容

- ① 「心の満点運動」の取組

- 「心の満点運動」では、全校朝礼などにおいて行事・時期に応じた望ましい取り組み方、心のもち方、人との関わり方を指導してきた。各学級では、月に1回「心の満点運動」に関連した内容で道徳と学級活動に取り組んでいる。

- 各クラスの廊下壁面に「満点ウォッチング」のコーナーを設置し、学年通信に感想を載せたり学年通信をWeb上に掲載したりすることで、保護者や地域

への啓発を行った。

- 学校だよりに人権コーナー「満点ウォッチング」を設け、「心の満点運動」や各委員会の実施した「満点運動」の様子を伝えることで、保護者・地域への啓発・連携を図った。

② 特別活動部会の取組

- 各委員会発案の「満点運動」

それぞれの委員会の活動内容に合わせて、学級委員会では【Smile Lunch満点運動】、美化委員会では【草むしりキレイ満点運動】、体育安全委員会では【絆満点運動】等を実施した。これらの「満点運動」では、「+1行動」も掲げ、定着・発展させることで、生徒が主体的に取り組んでいることを実感しセルフエスティームとセルフエフィカシーが高められるようにした。

- 人権週間の取組

春の人権週間では、「オール群馬いじめ防止」の取組を受けて学習を行い、いじめなど人権が侵害されている問題が生じた際、問題を解決するために協力を求め、働きかけ、主体的な態度で、問題の解決に取り組めるようにした。

- 「心の満点運動」を深化させる学級活動の授業実践

「いじめ」「居場所」「絆」をテーマとした校長講話から計画的に学級活動の時間に学習することで、「心の満点運動」を深化させ、望ましい人間関係を築けるようにした。

- 「協力的」「体験的」「参加的」な学習指導の工夫

人権感覚を育成する基礎となる「価値的・態度的側面」や「技能的側面」の資質・能力に関しては、言葉で説明するだけで育むことはできない。「自分の人権を大切にし、他の人の人権も同じように大切にする」といった価値・態度、コミュニケーション技能などは、生徒が自らの経験を通して初めて学習できる。本校生徒の実態から、「平成26年度学校教育の指針」や「はばたく群馬の指導プラン」をもとに、1単位時間の授業のつくり方や、事前・事後の活動の在り方について研修を行った。



【学級活動「けじめのあるクラス」】

③ 道徳部会の取組

- 「心の満点運動」を深化させる道徳の授業実践

人権教育年間指導計画の作成を通して、様々な教育活動と人権教育との関わりを明確にしてきた。一人一人の居場所をつくる「心の満点運動」の視点から価値やねらいを見直し、年間計画に位置付け、毎月1回「心の満点運動」の内容を深化させ望ましい人間関係が築ける授業が行えるようにした。

- 「協力的」「体験的」「参加的」な学習指導の工夫

「人権教育の指導法等の在り方について〔第3次とりまとめ〕」を基に人権教育の指導方法の基本原則として、生徒の「協力」「参加」「体験」を中核に置くことの意義を研修した。また、道徳の時間における指導の在り方について研修を行った。生徒相互が考えを伝え合い、学び合い、深め合えるように、全体協議、ペアやグループによる話し合いなど、



【道徳「遅刻が努力を無駄にする」】

目的に応じた形態を工夫した。また、ロールプレイなど体験的な活動を基に、生徒一人一人の生き生きとした考えを引き出せるようにした。そして、「体験的な活動と話し合い」、「まとめ」、「一般化」といった学習の過程を進めることで、体験した事柄を内面化し、自己変容へと結び付け、異なる意見を理解していけるようにした。

④ 教育相談部会の取組

○ 教育相談の考え方や技法を生かした活動の実践と職員研修

本校生徒の中には、いじめの問題や生徒の人権意識の欠如からくるトラブルや問題行動が見られた。そこで、友達や集団との望ましい人間関係を築く上で必要な技能を高めるため、スクールカウンセラーによる教育相談から明らかになった課題に応じて、各学年・各学期1回のSSTを行うことで、コミュニケーションスキルやレジリエンスが高められるようにした。また、ブレインストーミングや、エクササイズなど教育相談の考え方や技法を取り入れた授業づくりについての職員研修も行った。

○ 生徒と教職員の人権感覚に関するアンケート調査等の実施

本校における課題や生徒の変容をとらえるために、生徒と教職員の実態把握のためのアンケート調査及び各活動の生徒の感想等の分析を2回行った。また、教職員の人権感覚の高揚を図るために渋川市教育委員会が作成した「人権感覚チェックリスト」を活用し、自己を振り返らせることで、温かい学級・学校の雰囲気づくりのための一助とした。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

(1) 実施する際に生じた課題

- ① 生徒が主体となって「満点運動」に取り組めるようにするためにはどのような方法があるか。
- ② 「心の満点運動」や学校行事等と関連させた道徳や学級活動を実践し、「協力的」「体験的」「参加的」な学習指導を工夫することで、望ましい人間関係を築けるようにしたい。
- ③ SSTや5分間教育相談など、教育相談の考え方や技法を活かした活動を実施することで、友達とのコミュニケーションスキルを向上させたい。

(2) 解決策

- ① 生徒が主体となって、「満点運動」に取り組むことで常時指導が充実し、生徒

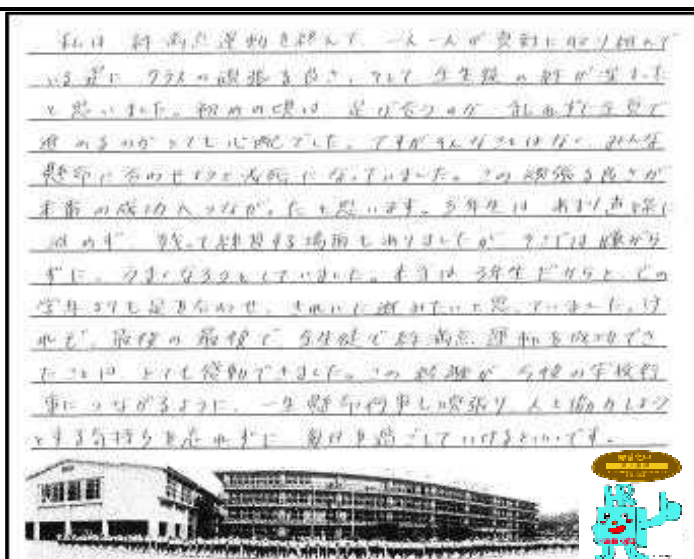
の自尊感情の高まりや自己効力感が高まり、自他を尊重する生徒が育成される。

- ② 道徳教育年間指導計画の見直しを行い、道徳的実践力のねらいを明確にしていく。また、生徒会専門委員会における人間関係について考える機会を設ける。人権週間に全校生徒や保護者に向けて各学級から提言として、人権学習発表会を行う。
- ③ スクールカウンセラーとのTTにより、豊かな人間関係づくりのためのスキル学習としてSSTに取り組んで人間関係づくりのスキルの習得を図り、学校生活につなげていく。

5. 実践事例の実績、実施による効果

研究の見通し①について

- 生徒が主体的に、一人一人が欠くことのできない存在であることを意識した「満点運動」を企画したり、人権教育の視点を取り入れた学校行事の目標を設定したりすることで、「互いを大切にすること」場面をたくさん見ることができた。また、すべての生徒がいやな思いをせず、明るく楽しく「満点運動」に取り組めるよう、生徒一人一人の立場に立った言葉かけや指導を意識して行えたので、「温かい雰囲気」の中で取り組むことができた。



【「絆満点運動」を終えての感想】

- 「満点運動」後の生徒の感想には、「〇〇ができるようになってうれしかった」「クラスの絆が深まった」といった記述をたくさん見ることができた。また、「次は〇〇頑張るよ」「来年は〇〇もやります」といった様子も見られ、生徒のセルフエスティームとセルフエフィカシーは高められたものと考えられる。

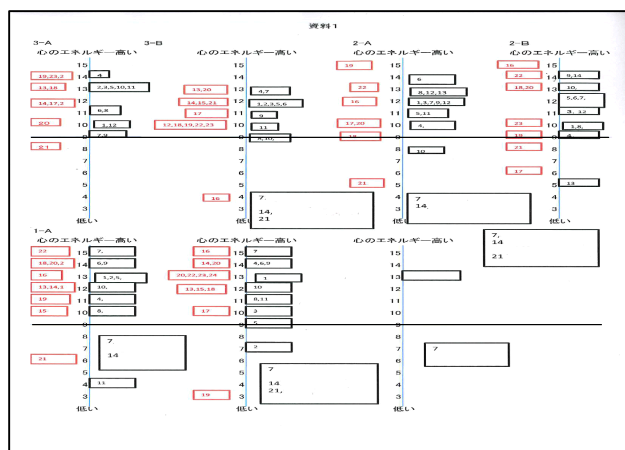
研究の見通し②について

- 導入部や展開部で「体験的」な活動を取り入れた学習を行い、資料と自分の体験を比較検討することで、共感的追求を深め、道徳的価値をより深めることができた。特に、話し合いについては、ワークシートに書く時間を十分にとり自分の考えを整理した後、ペアやグループで他の生徒と考えを比較することは、異なる意見を理解し高め合っていく上で有意義であった。
- 「道徳コーナー」を廊下の壁に設置し、道徳の時間に使った全員のワークシートを掲示した。授業を通して変容した自分自身を確認できるようになるとともに自分と異なる考えや意見を確かめ合うことができた。

研究の見通し③について

- 「学校で自分の居場所がある」という安心感、「友達と一緒に過ごせて楽しい」という満足感、「友達や先生からほめられた」という有用感の3つの要素を「心のエネルギー」と捉え、KJQ簡易調査を行った。結果は以下に示したとおり、大半の生徒が9点以上の「心のエネルギー」が高い状態であることが分かった。

- 各学期に1回、学校行事や時々の課題に応じて取組を設定し、SCを中心に学年全体で行ったSSTは、生徒の感想から、コミュニケーションスキル向上に、とても有意義な活動であることが見てとれた。今年度は職員対象にSSTに関わる研修を行い、各担任が、学級において随時SSTに取り組むことにより、生徒のコミュニケーションスキルの向見られた。



【H26 学校保健委員会アセスメント結果】
(KJQ 簡易調査)

6. 実践事例についての評価

生徒の実態把握のためのアンケート

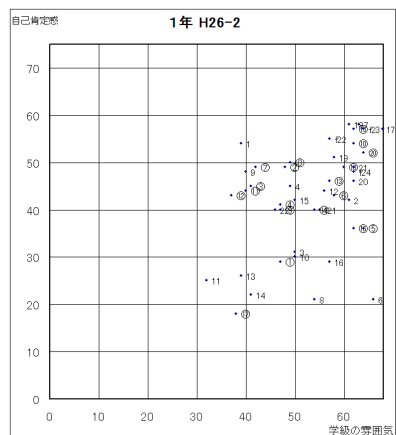
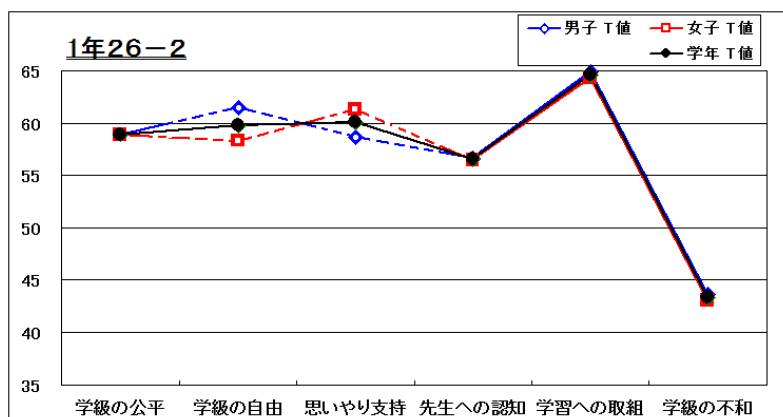
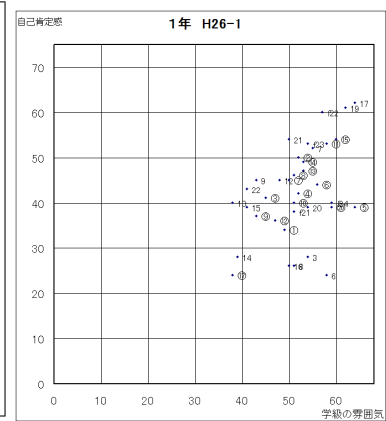
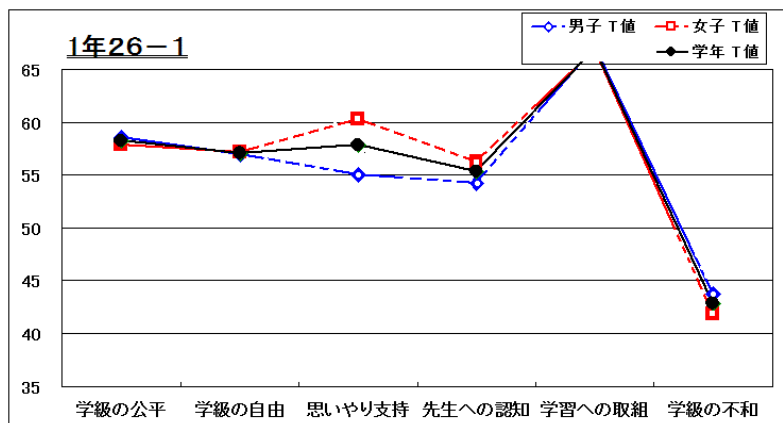
実態調査には、群馬県総合教育センターより公開されている、「学級の雰囲気と自己肯定感を把握する質問紙」(C&S質問紙)を使用し、分析には、学級の雰囲気調査とC&Sのプロット分布表を併用して行った。

学級の雰囲気調査は、学級集団の特性を把握することが第一の目的であり、学級の公平・学級の自由・思いやり支持・先生への認知・学習への取組・学級の不和を読み取ることができる。調査では、1年～3年共に学級の雰囲気が向上した。

(例) 1年生の変容

1学年においては、H26年度の1学期しか調査していないが、2か月という短い期間でありながらも、多くの生徒に学級への適応が確認された。

- ・ 学級の雰囲気調査では学級の公平・学級の自由・思いやり支持の3項目で57から60へと向上している。反面、学習への取組は学校生活への慣れとともに若干の低下が見られる。
- ・ C&S分布図では、自己肯定感(縦軸)と学級の雰囲気(横軸)ともに向上し、右上のエリアに集中する生徒が多い。特に、自己肯定感の伸びが見られる。



<研究の成果>

- 生徒が主体的に、一人一人が欠くことのできない存在であることを意識した「満点運動」を企画したり、学校行事の目標を設定したりすることで、「互いを大切にする」常時指導を行う場面をたくさんもつことができた。また、全ての生徒がいやな思いをせず、明るく楽しく「満点運動」や行事に取り組めるよう、生徒一人一人の立場に立った言葉かけや指導を意識して行えたので、「温かい雰囲気」の中で取り組むことができた。
- 「満点運動」や各学校行事後の生徒の感想には、「〇〇ができるようになってうれしかった」「クラスの絆が深まった」などの記述をたくさん見ることができた。また、「次は〇〇頑張るよ」「来年は〇〇もやります」などの様子も見られ、生徒のセルフエスティームとセルフエフィカシーが高められた。
- 道徳の時間の導入部や展開部で「体験的」な活動を取り入れた学習を行い、資料と自分の体験を比較検討することで、共感的追求を深め、道徳的価値をより深めることができた。
- 「道徳コーナー」を廊下の壁に設置し、道徳の時間に活用した全員のワークシートを掲示した。授業を通して変容した自分自身を確認できるようになるとともに自分と異なる考えや意見を確認め合うことができた。
- 職員対象に S S T に関わる研修を行い、各担任が、学級において随時 S S T に取り組むことにより、生徒のコミュニケーションスキルの向上が見られた。

<課題>

- 「心の満点運動」を深化させる授業実践を計画的に進めるための、人権教育年間指導計画の改善である。「心の満点運動」のねらいを更に具現化するには、道徳と学級活動を両輪とした計画的な授業実践はもちろんのこと、各教科や総合的な学習の時間との関わりを明らかにする必要がある。
- 「心の満点運動」を深化させる「協力的」「体験的」「参加的」な授業研究である。「自分の人権を大切にし、他の人の人権も同じように大切にする」、「自分と違う考えや行動様式に対しても寛容であり、それを尊重する」といった価値・態度は、言葉で教えるものではなく、生徒が自らの経験を通して初めて学習できるものであると考える。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

渋川市立赤城北中学校

人権教育を推進するに当たっては、一人一人の個性や能力を生かし、学級や学校の一員としての存在感が味わえるようにすることが重要である。本事例の特色は、学校を挙げて「心の満点運動」に取り組んだことにある。生徒が主体的に、一人一人が欠くことのできない存在であることを意識し、企画した「満点運動」を通して、自尊感情や自己回復力の高まりが見られたことが成果としてあげられている。また、「心の満点運動」に関連させて行った道徳の時間や学級活動において、「協力的」「体験的」「参加的」な学習指導を工夫することが、「心の満点運動」を深化する上で、有効であることも明らかになっている。各学校が、本事例で紹介された多様な実践を、それぞれの実態や地域の特色に応じて活用し、人権教育をより効果的に推進することが期待される。